

凡例

一、本書は、Jules Michelet 『Histoire de France』の「中世編」を全訳し六巻に分けたなかの第六巻である。翻訳には一九八一年にRobert Laffont社から出版された一卷本、Michelet 『Le Moyen Age』を用いたが、Flammarionの全集本（一九七四年刊）も参照し、また、当全集本の注のなかから、本文を理解するうえで必要と思われるものを「原注」として転用させていただいた。

二、人物や地名の表記は、原書ではフランス語式に表記されているが、拙訳では、現地主義の原則にしたがって、たとえば現在のドイツやイタリアに属する地名・人名は、それぞれドイツ語式、イタリア語式に表記した。ただし、わが国で歴史的に定着しているものは、現地主義にこだわらず、それを踏襲した。たとえばフランドルのアントワープは英国式表記であり、フランス式ではアンヴェルス、フラマン語式ではアントウエルベンであるが、わたしたち日本人にとっては古くから馴染んでいる「アントワープ」にした。

一、第五巻と同じく本巻でもミシュレは登場人物を「王太子」「ブルゴーニュ公」「アルターニュ公」「サン＝ポール伯」等、いわば役職名しか記していないことが多いが、同じ「ブルゴーニュ公」でも「ジャン無畏公」なのか息子の「フィリップ善良公」なのか孫の「シャルル突進公」なのかを読者に正しく理解・判別していただけるよう、できるかぎり調べて加えた。

一、また、イタリア、ドイツ、イギリスといった国名については、とくに、イタリアやドイツが統一国家になつたのは十九世紀後半であり、中世のこの時代に関して、これらの呼称を用いることにはご批判もあるが、場合によってこれらの呼び名を用いさせていただいた。

目次

第十三部 ルイ十一世の即位 3

第一章 統治の始まり（一四六一～一四六三年） 4

第二章 ルイ十一世の改革（一四六二～一四六四年） 37

第十四部 ルイ十一世の試練 79

第一章 封建勢力（公益同盟）の反撃（一四六五年） 80

第十五部 ルイ十一世の巻き返し 121

第一章 ノルマンディーの奪還 122

第二章 デイナンの蹂躪（一四六六年） 167

第三章 リエージュの降伏（一四六六～一四六七年） 196

第四章 ペロンヌとリエージュの破壊（一四六八年） 227

第十六部 外国からの牽制 265

第一章 王弟シャルルの死（二四六九～二四七二年） 266

第二章 ドイツ、スイスとの関わり（二四七三～二四七五年）

296

第三章 イギリス軍の侵入（二四七五年） 328

第十七部 近代への序曲 353

第一章 スイス人との戦争（二四七六年） 354

第二章 シャルル突進公の死（二四七六～一四七七年） 372

第三章 ブルゴーニュ公領の継承者マリー 389

第四章 ヌムール公の裁判（二四七七～一四七九年） 411

第五章 ルイ十一世の勝利と死（二四八〇～一四八三年） 438

訳者あとがき 470

人名索引 484

第十三部
ルイ十一世の即位

第一章 統治の始まり（一四六一～一四六三年）

長い間、ブルゴーニュ公によって養われ、その馬に乗せて連れ回され、その聖餐の器で食べさせてもらってきた王太子であったが、ルイ十一世としてフランス王領に入るや、自分こそフランスの唯一の王であり、ブルゴーニュもなければブルターニュもなく、これまでの友も敵もないことを示した。

「敵」とは、これまで父シャルル七世の側近として国を治めてきたメーヌ伯シャルル五世、ブルボン公ジャン二世やオルレアン公の庶子「ジャン・デュノワ」であり、アントワーヌ・ド・シャバヌ（ダマルタン伯）、ブレゼ（ピエール二世）といった人々であり、「友」とは、これからは自分が国の支配者であると思っっているブルゴーニュ公である。

国王は、前者の人々が、これまで事あるごとにイギリス軍を引き入れてきたので、真っ先に彼らから大西洋岸地方のノルマンディー、ポワトゥー、ギユイエンヌを取り上げた。お節介にも王の後見役を自任しているブルゴーニュ公についても、これからは勝手なことはさせないぞとばかり、王

の通行免状もなしに彼と交渉しにやってきた一人のイギリス人を捕らえさせ、その一方で、ブルゴーニュ家にとって手に負えない敵であるリエージュ市民と同盟を結んだ。

大貴族たちは亡くなったシャルル七世のために涙を流したが、それは、彼ら自身のための涙ともなった。シャルル七世の葬儀は彼ら自身の葬儀でもあった。シャルル七世の死とともに、大貴族たちには配慮して自己抑制的であったフランス王権は終わりを告げたからである。シャルルの柩のまわりで起きた「国王バンザイ！ Vive le Roi!」の叫び声も、彼らにとって、なんら響くものはなかった。あれほどたくさんの対外戦争と内乱を戦ったデュノワでさえも、今は小声で「それぞれが身の振り方を考えることだ」と呟くのみであった。

それは、口には出さずとも、みんなが考えていたことで、死者を放り出すや、生きている王のもとに先を争って駆けつけた。最も素早かったのはブルボン公ジャン二世で、彼は、保持すべきもの失うものをたくさんもっていたが、いまだ手にしたことのない軍司令官の剣をなんとしても手に入れようとしたのだった。しかし、彼が見出したのは、願ひとは逆に、ギユイエンヌの支配権の喪失であった。

自分の立場を強化することに懸命になっている大貴族たちをよそに、王は彼らの手を縛るためにもっぱら都市を話し相手にした。ノルマンディーでは、ルーアンに自衛権を回復してやり、ギユイエンヌでは、名士たちを身近に招いた。オーヴェルニュとトゥレーヌでは、クレルモンとトゥール両市に市民の要望に応じて集会を開くことを認可した。王の使者は、ガスコーニュを通過したとき、

人名索引

※欧文表記は原著に従った。なお、本巻は全体がルイ十一世の治世についての記述となっており、「ルイ十一世」はほとんどすべてのページにわたって名前が出て来るので、この索引ではあえて挙げなかった。

【ア行】

- アエネーイス Énée 125
アキレウス Achille 323
アーサー王 Arthur 44, 387
アダム Adam 10
アドルフ (クレーヴの) Adolphe de Crèves 14, 192
アドルフ (ゲルドルの) Adolphe de Gueldre 304, 305, 368, 408, 419, 420
アニェス・ド・ブルゴーニュ Agnès de Bourgogne 231
アニユレ Agnelet 262
アブラハム Abraham 102
アラゴン王フアン二世 Juan 20, 29, 30, 439
アランソン公 (ジャン二世) Alençon, duc d' 7, 23, 49, 336, 448, 449
アルノルド (ゲルドルの) Arnould de Gueldre 304, 305
アルビー Alby 337
アルブレ伯 Albret, comte d' 49
アルプレヒト (ブランデンブルク辺境伯) Albert 323, 326
アルマニャック伯 Armagnac, comte d' —ジャン四世 Jean (1418-1450) 336
—ジャン五世 Jean (1450-1473) 49, 88, 89, 91, 101, 109, 266, 287, 336, 337, 423
アンジェロ・カト Angelo Cato 365, 370, 389, 452
アンヌ・ド・フランス Anne de France 172
イザベラ (カスティリヤ女王) Isabelle 285
イザベル (ランカスター家の) Isabelle 169
イザベル・ド・ブルボン Isabelle de Bourbon 201, 203, 268, 393, 396
イザベル・ド・ポルトガル (フィリップ善良公の妻) Isabelle de Portugal 37, 48, 156, 157, 169, 195, 200, 228, 234, 300
イザベル・ド・ロレーヌ (ルネ王の妻) Isabelle de Lorraine 368, 443

ジュール・ミシュレ (Jules Michelet)

フランス革命末期の1798年8月にパリで生まれ、父親の印刷業を手伝いながら、まだ中世の面影を色濃く残すパリで育ち勉学に励んだ。1827年、高等師範の歴史学教授。1831年、国立古文書館の部長、1838年からコレージュ・ド・フランス教授。復古王制やナポレオン三世の帝政下、抑圧を受けながら人民を主役とする立場を貫いた。1874年2月没。

桐村泰次 (きりむら・やすじ)

1938年、京都府福知山市生まれ。1960年、東京大学文学部卒 (社会学科)。欧米知識人らとの対話をまとめた『西欧との対話』のほか、『仏法と人間の生き方』等の著書、訳書にジャック・ル・ゴフ『中世西欧文明』、ピエール・グリマル『ローマ文明』、フランソワ・シャム『ギリシア文明』『ヘレニズム文明』、ジャン・ドリュモ『ルネサンス文明』、ヴァディム&ダニエル・エリセーエフ『日本文明』、ジャック・ル・ゴフ他『フランス文化史』、アンドレ・モロワ『ドイツ史』、ロベール・ドロール『中世ヨーロッパ生活誌』、フェルナン・ブローデル『フランスのアイデンティティ I・II』、ミシェル・ソ他『中世フランスの文化』、ジュール・ミシュレ『フランス史』[中世] (I～V) (以上、論創社) がある。

フランス史 [中世] VI

HISTOIRE DE FRANCE: LE MOYEN AGE

2017年11月20日 初版第1刷印刷

2017年11月30日 初版第1刷発行

著者 ジュール・ミシュレ

訳者 桐村泰次

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

装幀 野村 浩

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1664-7 ©2017 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。